
気がつけば異世界の黒き魔女

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけば異世界の黒き魔女

【Nコード】

N3171BA

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

黒き魔女が現われしとき、魔王は復活するだろう。

そんな古の言い伝えがある世界。

ただの女子高生だった水瀬やよいは気がつけば異世界にいた。

魔女で、魔王がいて魔物もいる世界。

王様は勇者で世界を守ってるんですって!!

魔女っ子にされたやよいは無事に帰れることができるのか!？。

き直り、それを着てコートを羽織った。バイト先ではどうせ制服は着替えるのだ。慌しく着替え終わり、玄関の丸い小さな鏡を覗き込んだ。

鏡の中のやよいが大きなアーモンドアイをぱちくりさせて私を見返していた。後れ毛が揺れる。メイクアップする時間はない。前髪を軽く摘んでにっこり笑ってみせる。

結構スマイルには自信はあるのだが、それを特定の男の子に向けたことは残念ながらまだない。もっぱらバイト先でのゼロ円スマイルばかりである。彼氏いない歴17年です……。

笑顔、笑顔。さあ、バイトだ！ と私は空元気を回転させてブーツに足を通す。携帯はポケットと…ポケットに手をつ込んで所在を確認する。電池はさつき充電したばかりだ。最後にスカートの裾をつまみ、問題ない、と誤魔化した。

そしてやよいは玄関の扉を開いていた。

【2】

「はえ？」

我ながら間抜けな声が出た。あまりにも突拍子で、突然で、どう理解したらいいのかわからない。そんな響きを持った声であった。空を見上げれば灰色の空からは雪が降ってきていた。

はは、ホワイトクリスマスか、恋人さん達はラッキーじゃん。

周囲の人達の視線が突き刺さる。その居心地の悪さと周りの不衛生さに私の思考はフリーズしていた。雑踏の中、暗い空の下、人々

が白い息を吐きながら路地を行き来している。

えーと…ここはどこなんでしょう？

家の玄関の戸を開け、気がつけば見知らぬ街路にいた。欧州の町並みにも似ているが、どこの国の建築様式なのかわからない。レンガ造りの壁に大きな石をはめ込んだ石畳は歪んでいて、道路は真っ直ぐ平坦ではなかった。建物の屋根は高く赤い色に塗られている。屋根から突き出した煙突からは白煙がなびいているのが見えた。ガラガラと音を立てて馬車を引いた馬が駆けてきて、慌てて路上の端によると汚水が跳ねてやよいの顔を汚した。顔に手を当てれば泥水の混じったそれが私の手を汚して、手をこすっていた。

道路は今通り過ぎた馬車が二台分もないくらいの幅だ。やよいは石壁に背をつけて、通り過ぎる人達を恐る恐る観察した。

皆急いでいるように見える。肩に布袋を提げた男達が何人もいる。女もいるが顔をフードで覆い隠している。服装は粗末で、どうみても現代ファッションからは程遠いものだった。色褪せ、つぎはぎも当てあれ、それが模様となっていた。その人達はみんな白色人種だった。

薄暗い路地に立ち尽くしながら、いつまでもここにいるのは気が引けて、早く立ち去りたい気分になっていた。私はコートごと身体を抱きしめる。だが、どこへ行けばいいのだろうか？

夢であるならとつくに冷めている。この寒さだ。ホッカイロが欲しかった。

「黒髪の魔女だよ……」

行き交う人々の雑踏音に紛れて、その囁くような声をやよいは聞

き取っていた。そちらに顔を向けると、建物の隙間の暗がりから、汚れた顔の5、6歳の少年が私を見つめていた。ぼさぼさの髪に半裸に近い状態で、肩から布切れがずり落ちる。服も身体も泥で汚れ、人種さえも不明だった。

魔女？ その子が言ったのだろうか？

「えと、君…？」

やよいが声をかけると、ビクリ、と少年の怯えたような表情が私を見返した。暗がりの奥から少年より年長のガリガリに痩せた少女が現れ、乱暴にその男の子の手を引いて駆け去って行ってしまった。やよいは暗がりの向こうに消えた二人の子の背中を見つめたまま動けなかった。あの二人が見せた怯えの顔が忘れられなかった。

私は何もしていない、なのに何故？

意識を引き戻したのは街路のざわめきだった。どこからかラツパの音が響いて来る。その音を辿って、やよいは路地から大通りらしい交差する道に出る。多くの人達が集まって口々に何か言い合っていた。

爆ぜる松明の火が鉄の入れ物にくべられて燃えている。それが大通りのあちこちに設置されていて、人々がそこに集まっていた。

風が吹いて寒かった。耳まで冷たくなっていたからコートのフードを目深にかぶる。松明の側には近寄れなかった。そこにいる人達の雰囲気はどこか私を遠ざけさせていた。

またラツパが吹き鳴らされる。今度はさっきよりもその音を大きく聞き取っていた。道の向こうの曲がり角から細長い棒が見えて、その先には赤い布がはためいていた。旗だと気がつく。紋章が描か

れているようだが、やよいの位置からではよく見えなかった。

その先頭から歩いてくるのは兵士のようだった。兵士とわかったのは同じ制服を着た集団だったからだ。その格好を見て私は驚いてしまった。

あまり歴史ものには詳しくないけれど、フランスの銃士が着るような服を身につけ、羽根突きの帽子をかぶり、腰にはサーベルを下げている。いわゆる三銃士に出てくるような服装だ。やよいの浅い知識ではそう理解するのがやっとで、その列が目の前にやってくる、人々が用意していた色紙をばら撒き始めた。あまり衛生的でもない道だが、色とりどりの紙がばら撒かれて、行列は派手さを増した。

併歩する音楽隊がドラムを鳴らし、音楽といえるのかわからない騒音を奏で立てた。その音の不快感と人々の声にやよいは耳に手を当てる。右を見ても左を見ても熱狂する人達の熱は収まらない。胸に暑苦しさを感じて、私は気持ちが悪くなった。

王様だよっ！ と誰かが声を上げた。大きな馬車が通り過ぎる。その上に一際立派な服装をした青年が座っていた。頭には金の冠をかぶり、襟元がふわりとした毛つきの宝石を散りばめた赤いマントを羽織り、その細身の身体を包んでいる。

王と呼ばれた青年の隣には、白い衣装に身を包んだ、そっくりの顔をした美貌の天使が二人座っていた。天使、というのは比喩だ。その双子は金色の柔らかな髪に澄んだブルーアイで、周囲の歓声を受けながら泣きも笑いもせずに無表情を貫いていた。少年なのか少女なのかまでは判別できなかった。

突然人々がざわめいて、群れた人々が散り始めた。何ごとかを見ると、馬に乗った騎兵が威嚇するように道端の人々を追い立てている。騎兵は一人ではなく、あちこちで馬に乗って鞭を振るっていた。

その中にやよいも巻き込まれていた。逃げ遅れ、逃げる人々に突き飛ばされ、街路脇の民家の前で転んだ。膝を擦り剥いていた。

長い鞭が振り上げられ、人々を追い立てるように路面に鞭が激しく叩きつけられる。黒い帽子をかぶった、青い制服を着た騎兵の男達。

その音に心臓が止まるようなショックを受けて、やよいは身動き一つできなくなっていた。

馬のいななく声がすぐ側で聞こえて、見上げると馬上から見下ろす冷たい青い目が私を見下ろしていた。怖くて動けない。騎兵の手に握られているのは鞭だ。恐ろしさに身を強張らせる。目を瞑ったが、鞭はいつまでたっても振り下ろされなかった。

そして何事もなかったように馬車が通り過ぎていく。

頭を押さえ、屈みこんでいたやよいは、ようやく顔を上げて立ち上がった。その時、馬車の上から民家の方に顔を向けていた男と視線と視線が交じり合った。王と呼ばれた青年の鷹のような目が私を見ていた。

気のせいだろうか？ それはほんの一瞬のことで、すぐに視線を前方に戻すと、市民に手を振って応えていた。

その列が通り過ぎるまで私は震えて動けなかった。寒さに手も足も凍える。行列が去り始めて、人々も揃って歩き始める。

急に場違いさを感じて、ここにはいけないような気がしていた。人々が歩き出す方に逆らわずに歩き出し、路地を伝って足早に遠ざかるうとした。気持ち之急いで、フードが脱げたこともやよいは気がつかないでいた。

【3】

人のいない路地裏へ

あの行列も喧騒も遠ざかって、私は何とか落ち着きを取り戻す。その時、人の気配を感じて振り向くと、数人の男達が路地の向こう側からやってくるのが見えた。腰にはサーベルを差し、緑色の銃士の服を着ていた。

最初は気のせいかと思ったが、その足取りは躊躇うことなく私を追いかけているのだと理解して焦る。急いで走り出せば気がつかれてしまう。

路地裏の石畳は狭く、人が二人、やっとすれ違うほどの幅しかない。角を曲がり、そこで私は走った。地理の知識はない。細い道を駆けて、崩れかけた壁穴を見つけて急いでコートを脱ぐと、その穴に服が汚れるのも構わずにやよいは身を押し込んでいた。

服についた泥を払って立ち上がる。追ってくる気配と足音はすぐそこで、靴音が石の路面にこだましていた。

廃屋の半ば半開きの腐りかけた戸に触れると中は暗かった。そこに身を滑り込ませ、コートを抱いて座り込んでいた。男達が穴に気がついて目をつければ終りだった。心臓が早鐘を打ち、やよいはかじかむ手を両手で握り締めて息を吹きかけ、目を瞑った。

どうか、行ってくれますように！

「おい、こつちにはいないか。見逃したか？」

「そんなわけがない。もう一度探せよ」

「黒髪の魔女だ。捕まえれば金貨一〇〇枚だ」

魔女。またその言葉だ。黒髪の女。それは間違いなく私のことだろう。金貨一〇〇枚がどれだけの価値かわからない。だが、男達が躍りになって捕まえようとするほどの額だ。

男達の気配が遠ざかる。一分、二分、五分は過ぎただろうか。その時間を永遠のように感じて、手をひたすら擦っていた。

もう来ないだろうか、と安心して立ち上がると背後から肩を思い切り何者かに掴まれていた。その万力のような手が肩を抱き、口はその骨ばった手を押し当てていた。

心臓が飛び上がるほど驚いて、悲鳴すらも出てこなかった。

「しゃべるな」

耳元でそのしわがれた声が脅し声を上げる。叫び声は上げられない。外の男達に気がつかれてしまうかもしれない。実際は出そうにも出せないのだが、謎の男はやよいの事情になど頓着はしなかった。

「女、質問に答える。何故ブロワの部下に追われていた？ 手を離すぞ。叫んだら殺す」

襟元に銀色の鈍く光る刃が突きつけられた。その刃が妙に非現実に見えていた。

ブロワ？ その名前に聞き覚えはない。やよいは首を横に振った。正体不明の男に密着されている不快感が身体を突き抜ける。怖かったが、気を引き締める。

「知らない。そんな人達……」

やつとのことですら答えるが、万力のような手に力が込められる。

「答える」

やよいは痛みに悲鳴を堪え耐える。あの男達は何が目的だった？

「き、金貨一〇〇枚だって」

「何のことだ」

「私を…捕まえれば…金貨一〇〇枚だつて……」

途切れ途切れにようやくそれを伝えるが、やよいを拘束する手は緩まなかった。訪れた沈黙は男が思案する間だったのだろう。

「今から離す。ゆつくりと振り向け。妙な真似はするな。それと質問された以外のことには答えるな」

なんとという上から目線。こいつきつとかなり意地悪ね、と勝手に決め付けると、やよいは言われたとおりにゆつくりと、足元を回転させて振り向いていた。

暗い室内に男の影。ゆうに一八〇センチは越えているであろう姿が陰になって見えた。割れた窓から差し込む光だけが頼りだった。男の手にはナイフが握られたままだ。刺激しないよう、馬鹿みただけで愛想笑いを私は浮かべていた。

「どこから来た？」

「……」

「答える」

「に、日本……」

「ニホン？ どこだそこは？」

「どこつて……。ひっ……」

ナイフがきらめき咽喉元に突きつけられていた。ごくりと私の咽喉が唾を飲み込んだ。男の鋭い眼光がやよいを捕らえて離さない。

「質問に答えると言つたらう。名前は？」

「水瀬やよい……」

「ミナセヤヨイ？ 妙な名前だ。格好も変だ」

容赦ない勝手な批評に少しばかり私は腹が立つ。男の目に好奇心が浮かんで、学校の制服を上から下まで眺めていた。

セーラー服をじろじろ眺められるのはあまりいい気分ではなかった。特にそういう類の視線は同年代の子からおじさんまで容赦なく浴びせてくるものだった。その視線にどういいう意味が込められるのかを知らないわけでもない。スカートの丈は校則でしっかり守っているつもりだ。

だが男はすぐに興味をなくしたのか、コートに手を伸ばさず。そしてポケットの中から学生証を取り出していった。

「これは何だ？」

「が、学生証。私の国の……」

「学生か。年はいくつだ？」

「17です……」

男の問いかけに私はぶつきらぼうに返していた。男は学生証を開くが、文字を読めなかったのかすぐに閉じてしまう。

P I P I P I P I P I P I . . .

突然鳴り始めたアラーム音。その時初めて男が動揺する。

「何だ、何の音だっ！！」

男の手がやよいの手を掴んで、捻り上げて床に組み伏せる。あまりの痛みに返事すらできずに私は喘いでいた。

「携帯の…アラーム……」

「アラームだと？ 魔法か」

耳元で男がそう言った。魔法？　ここには魔法がある??

「そ、そうよ。時間になると鳴るの。すぐ止まるから」

その言葉を言い終えると携帯のアラームが止まり、室内は沈黙に包まれる。男の手がわずかに緩むが立ち上がる気力はない。

「いいだろう……。立て」

「た、立たせてくださいよお……」

やよいが情けなく呟くと力強い手が差し出されて、それに掴まって立ち上がる。窓から差し込む月明かりが私の顔を照らした。その眩しさに目を細める。

「なるほど黒い髪…魔女…か。お前を捕まえて差し出せば金貨一〇〇枚ってわけか」

意地悪く男は口の端を曲げて笑った。

やっぱり…私は突き出されるんだ、とやよいは絶望感でいっぱいになる。今でさえわけがわからないのに、お金と引き換えに取引されてしまうのだ。

泣きたくなる。突然こんな場所に放り出されて魔女扱いされ、男に苛められて、お金欲しさに売られるのだ。まるで不幸のオンパレード。なんか…腹立ってきた。

「何笑ってるんですか？」

やよいは男を睨みつけていた。もう怖くなんてないんだから、と強がりだが、そう自分を奮い立たせる。

「いや…魔女ね。お前が本物なら俺が連中に突き出す理由はない」
「へ？」

どういう意味だろう？ 本物なら？

「何故なら俺とお前は……」

そう言った男の横顔をわずかな明かりが照らす。
そして金色に光る双眸に変えて黒髪の少女をその目に映し出して
いた。

【2】気がついたら逃亡者

【4】

何、何なの？ 目の前の男をじっと見てやよいは震えていた。光る双眸は金色で、人のものとは到底思えない。この男は人じゃない？ 人でなかったら何者なのか？ 私はゴクリ、と渴いた咽喉に唾を飲んでいた。

その時だ。物々しい気配がこの家の周囲を取り囲んでいた。それに気がついて私は窓の外を見た。ここからでは何も見えないが、男の目が細まって口に指を当てた。

黙っている、という合図だろう。それに従うか迷って、結局、やよいは立ち尽くしたままでいた。窓の側に寄り、油断なく外の気配を覗いた男が笑う。

「ひい、ふうみい…奴ら、かなり仲間を連れてきたようだな。ずらかるか」

そう言っつて男は首を振ると、部屋の奥に歩いていく。

「へ？」

「巢を嗅ぎ付けられちまったからなあ。ま、いいけどな」

「ど、どどこ行くんですか？」

「どっこっておめえ、ずらかるつて言っつたらろう？ 無宿人だしな。ああいうのに捕まるとめんどくせえ」

あばら家の窓を開けて男が半ば身を乗り出すした。

「わ、私はどうすれば？」

何だか置いていかれそうな気がして、慌ててやよいは声をかけていた。一人放り出されるのはごめんだ。

「あんたは金貨一〇〇枚で連中がお持ち帰りだろう？」

え、ええー？　そ、それは無しでお願いしたいです。

「それは断固拒否です！　私、捕まりたくありません」

「じゃあ、逃げるしかねえなって。駄目か、すっかり囲まれてら」

振り返った男の目が真剣なものになる。そしてやよいを上から下までじつと眺め回す。

「あんた、魔法使えるのか？」

「えっと……」

その言葉に私は俯いた。どうしよう、さっきは魔法だ、なんて言っただけで、あれはただの携帯のアラームだ。羽織りなおしたコートポケットの上から携帯を握り締める。こんなものがどうして役に立つのだろうか？

「なるほど、なるほど……。じゃあ、金はあるか？」

「お金は…その……」

財布の中にある千円札がこの世界でどれだけ価値があるのかわからない。というかただの紙切れ扱いされそうな気がする。答えようがなくて黙ってしまっ。

「じゃあな、元気で生きろよ」

くるりと振り向いて男は片手を振るとしみじみとそう告げた。

「え、ええ！？ さっき、わたしが魔女ならどうこうって言ったじやありませんか」

「言ったなあ、うん。本物ならな。本物の魔女ならばだ。見た感じちつと変わった格好しちやいるが、あんたは人間だ。違うかい？」

「…はい」

「だよねえ…やっぱり」

その時、じわり、と目元に滲むものが私のまぶたを熱くしていた。耐えていたものがもう耐えられなくなつて決壊を起こしていた。

こんな見ず知らずの場所に突然放り出されて、怖い目に遭つて、男達にどんな目に遭わされるかもわからないのだ。出会つたばかりで怖いけれど、目の前にいる人にすがりたくなつてしまった私は馬鹿だ。途方もなく大馬鹿だ。

「あのなあ、泣くんじゃねえよ……」

「う、ごめんなさい……」

男は頭をかいて苦虫を嚙んだような顔をする。

私はハンカチを取り出して顔に当てる。恥ずかしい。泣いている顔を見られてしまった。私の助けてくれるんじゃないかという勝手な願望をこの人に押し付けた。そんなことを考えたのをこの人に知られたくなかつた。

話してみても本当はいい人そうに思えた。だからすぎるのはこの人を利用することだ。自分が恥ずかしくて、また涙が出てきた。

「ふむ」

と呟き男は頭をかいた。

「まあ、後払いでもかまやしないけどよ」

「え？」

「どうせ逃げる手間は一緒だしな。一つだけ言っとくぞ。しがみついて絶対離すんじゃないやねえぞ？」

「あの…どういう意味ですか？」

ぐしょぐしょになったハンカチを離して訊ねる。

「ああ、見てなって。後、驚いて悲鳴とかも上げるんじゃないやねえ。俺様の取って置きだ」

何だか意味がわからないことを言っつて、男は床に四つんばいになる。そして息を吐き出すと空気が震えて男の姿形が変わり始めた。むきむきと筋肉が盛り上がり、その姿は人でないものに変じ始めていた。

やよいはそれを息を呑んで見守っていた。人ならざるもの。その変異を目に刻み付けていた。

それと同時に窓から火の玉が投げ込まれて、室内のカーテンに燃え移っていた。見る見るうちにそれは燃え上がり、その火に照らされた男の正体を私は見えていた。

「掴まれ」

「は、はいっ！」

目の前にいるのは巨大な虎だった。動物園で見る虎より遙かに大きくて、その凶悪さにやよいは頭から血が引いていた。大きな口から言葉が出て驚いたが、それは知っている男の声だったから何とか理性を取り戻す。

「かまわねえから、しっかり掴め、皮一枚分もいたかねえからな」
「わかりました」

その背に跨ってギョウツと強くやよいはその毛を握り締める。滑らかなその毛並みは王者の風格があつた。

そして戸を突き破って虎が庭に躍り出ると、侵入していた男達に踊りかかった。あつという間に男数人を打ち倒すと、ひるんだ男達の間隙を突いて街路に飛び出すと風のように駆けだしていた。

【5】

「逃げたぞ！！ 撃てっ！ 殺して構わん。魔王の使徒と黒い魔女を殺せっ！！」

軍靴を鳴らして足踏みし、頭上を指差した指揮官の男が怒鳴り散らす。それに従つた衛兵達が一斉にマスケツト銃を構えた。

パンっ！ パンっ！ パンっ！

衛兵が構えたマスケツト銃から次々に白煙が上がり、銃音が周囲に鳴り響いた。弾丸が屋根を砕く音がすぐ近くで聞こえる。銃弾が跳ねて煙突に傷跡をつけていた。

「ひ、ひえええ」

「おい嬢ちゃん、しっかり掴まってるや」

渋い声が私のすぐ前から聞こえた。こうなつた原因を作つた本人が目の前にいるのだが、今は反論してる場合じゃなかった。今は生きて逃げないといけないんだ。

「そんなこと言われましてもおおっ！」

「跳ぶ」

次の瞬間、躍動する獣の肉体。その身体が宙を舞った。月夜にそのシルエットが浮かび上がる。眼下の街は遙か下だった。

落ちれば石の床に叩きつけられ、即死は間違いない。そう想像してやよいは目をつぶって、目の前の獣の背に必死にしがみついていた。銃弾がすぐ側を飛んでいくのがわかった。もう心臓がバクバクいっ放しだった。

やよいが掴まっているのは獣の毛だった。黄色と黒の縞模様の毛並みの下で筋肉が躍動感ある動きを伝えてくる。

「ぎゃふっ！！」

衝撃と共に着地。信じられない距離を跳んでいた。その割りに着地した時はふんわりと風が包んだようでそれほどの振動もなかったが、私の口から出たのはかなり間抜けな声だった。

「おい、舌嚙むんじゃねえぞ。めんどくせえから」

「あ、あのお…もつと安全運転でお願いします」

向かいの建物の屋根に下り立ち、やよいの抗議を無視して。その虎は眼下の衛兵達に向き直った。

巨大な、普通の虎の二倍はあろうかという巨体だ。その背に黒い髪をポニーテールにした少女を乗せている。月明かりを背に悠然と立つ姿は見る者に畏怖と恐怖、そして言いも知れぬ神秘を感じさせた。

「嬢、耳、しっかり閉じな」

「はえ??？」

やよいは言われたとおり両耳に指を突っ込んだ。そして虎が吼えた。それは衝撃音となって空気に伝達して伝わり、それを聞いた者の鼓膜に影響を与える。

「すぎ、ざざざー」と音を立てて、建物の屋根に隠れていた兵士達がずり落ちて、辛うじて屋根の縁で止まった。

えっと、隠れていたの？ 男の人達が落ちなくてよかったと胸を撫で下ろす。今は私達を捕まえようとする人達だけど、やっぱり死んで欲しくはなかった。

「な、何をしたの？」

「なーに、魔法さ」

わずか目だけを動かして、やよいを見た虎がそう答える。

魔法って……。私にやり返したつもりらしい虎を見る。

「行くぜ。こんな雑魚相手にしてられねえ。近衛が出てきたらやばい」

「近衛？」

やよいの問いかけに虎は答えずに数歩歩き出すと、私は彼にしつかりと掴まった。そしてまたあの浮遊感が身体を包み、やよいは空を飛んでいた。

屋根から屋根へ、そして城壁を飛び越えて、跳躍する虎は大地に降り立って、遠くに見える森を目指して駆け出した。

やよいが背後を振り向くと、城壁の門が開いて飛び出してくる騎兵の姿が見えた。まだ逃亡劇は終わっていなかった。

「しつこい連中だぜ。俺は昼寝してただけなんだがなあ……」

虎がぼやく。

「ねえっ！ 馬で追いかけてきてるよ！！」

「何、森に入れば追っては来れんさ」

「何で？」

私は疑問を口にする。

「森には魔が巣食うからな」

その時、大地が爆ぜた。爆音を立て、地煙を派手に吹き出して地面が割れた。そして飲み込むかのようにそれが閉じていく。

それをステップを踏んで上手くかわすと、割れた大地の間隙を縫って、虎が土の煙幕に飛び込んだ。

「きゃっ！！」

「騎兵は魔法衛士だな。奴等に比べたらマスケット銃なんて玩具さ。舌噛むから黙ってるよ」

「う、うん」

魔法衛士？ 銃が玩具？ 今のって魔法なの？ 疑問はやたらと出てくるが、今はそれどころではない。

目を瞑り、必死にしがみつきながら、振動で舌を噛まないようにギョツと口を閉じていた。背中に土やら何やらが降り注いでくる。

一陣の風となって虎が大地を駆け抜ける。その速さは風圧で目も開けていられないほどで、何とか薄目を開け、迫り来る光を見たと思ったら、空がカレイドスコープを覗いたかのような結晶を映し出していた。

それは冷気が空気を凍らせたものだった。結晶が砕け散り、氷の槍が一斉に振り注いで来た。

えー、あれー、魔法???

虎の周囲に風が集まり唸りを上げる。轟つと音を立てて一陣の風が吹き抜けて、いくつものつむじ風を生み出すと、氷の槍の軌道は外されて、駆ける虎をよけるように落ちていく。そして氷は砕け散った。

冷気の余波がやよいの頬を叩いて、私はその冷たさに身体を振るわせていた。

すごい。けど、あんなの食らったら死んでしまう。いや、相手は殺すつもりで射掛けてきているのだ。

「ったく、くたびれるなあ。こっちはブランクだっつーの」

そう虎が愚痴るが森はもうすぐ目の前まで迫っていた。

「が、頑張つて」

何とかやよいはそう言葉を振り絞ると、虎は森の木々の中に躍り込んで、闇に包まれた緑のヴェールの中に消えていった。

騎兵がすぐ後まで迫っていたが、森の一步手前で立ち止まると引き返していた。

【2】気がついたら逃亡者（後書き）

虎男の名前を何パターンか考えたものの、あまりイメージじゃなかったりします。

そんなわけでワータイガー男の名前を募集中。

参考

実はまだ二十代。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171ba/>

気がつけば異世界の黒き魔女

2012年1月10日07時57分発行